

<上海国際当代戯劇季> 劇団道化座「父と暮せば」公演



2008年11月、劇団道化座は「亞洲当代戯劇季（アジア現代演劇祭）」改め「上海国際当代戯劇季（上海国際現代演劇祭）」となった演劇祭(2008ACT)に参加した。13度目の訪中公演である。

今回は劇団オリジナルではない作品を海外で初上演した。作品は広島を扱った井上ひさし氏の二人芝居『父と暮せば』である。以前から上演させていただいていたが、キャストを改め、9月に劇団スタジオで、11月には兵庫県下の高校2校で公演後、上海での上演に至った。



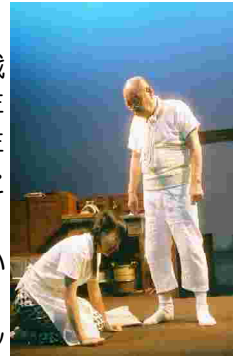
出演の新コンビ、須永克彦と松澤ふゆの年齢差は50歳。固唾を呑み新コンビによる出来上がりを見守る団員一同。酷暑の中、夏休み返上による猛稽古の甲斐あってスタジオ公演では大方の好評を得、また約1000人の高校生を前にした高校での2公演も静かに見入る生徒たちの多くが涙し、会場から熱い拍手が沸き起こった。これで一安心、自信を持って

上海での公演に臨める。

戦争で日本が被害をもたらした彼の地で、原爆を扱った芝居は理解されるのか。不安だが、これは親子の愛の物語であり、民族や国を超えた人間の物語である。今も繰り返される愚かな戦争、世界中のどここの国でも決してあってはならない原爆の被害。これは被爆した広島、長崎だけの願いではなく、被爆国日本の願い、そして人類全ての願いのほぐれだ。戦災ではないが、阪神・淡路大震災で一瞬の内に大切なものを失い、広島や長崎と似た体験をした神戸に暮す私たちにとって、その思いは強い。



11月19日午後、上海着。
会場は上海話劇芸術センター3階<戯劇沙龍>。同センターでの上演は02年の『家族』、04年の『おやし』、05年の『幸福』、06年の『メグミとともに～人生感受』に続いて5度目なので、今や掃除の小母さんとも顔見知りという心安らく劇場である。



20日朝から仕込み。今回は、和ダンス、卓袱台、文机、踏み台、水屋、台所の流しに垣根や塀など、運搬不可能な大道具は全て同センターに製作をお願いした。製作担当は同センターの若いスタッフたちだ。勉強のために今回演劇祭に参加した戯劇学院の学生もいる。彼らは見事に私たちの要求に応じてくれた。黒塗りの卓袱台、引き出し可能な和ダンス、ちょっと古ぼけた踏み台などは日本へ持ち帰りたいほどの出来栄えだ。上海訪問の度に感心するのは、若いスタッフが次々と育っていることだ。時折、舞台の仕込む具合を気にかけて、顔見知りのベテランスタッフが訪ねてくれる。旧知の仲、再会が嬉しい。



私たち道化座は神戸の小さな劇団、何もかも手作りが基本、誰でも何でもやってしまう。というか、せざるを得ない。当然だが中国は仕事がきっちり分業、分担、割り振られている。翌日、字幕の位置をちょっと変えてくれと頼むと、「今日は字幕をセットするスタッフが来ないので不可能だ」という。背の高い不安定な脚立を見上げ「ダメなら、私が上る!!」と言うと、こんなオバサンに脚立から落ちてケガでもされたら大変と思ったのか、慌てた中国の舞台監督が「じゃあ、僕がやります!!」と言ってくれた。結局、照明のスタッフが手を貸してくれて字幕は希望の位置に。分業、分担が原因なのか、時間の観念が異なるのか、頼んだものが到着せず、待つこと暫し。「まだですか?」「まだ来ないのですか?」を連呼、さぞセツカチな日本人という印象が残ったにちがいない。ともあれ、舞台は午前中に全て整い、無事午後のリハーサルとなった。誠心誠意尽してくれた上海のスタッフの皆さんに心から感謝致します。

夕〜ジャ〜、
シヤジャノ〜ン!!





21日19:30、初日本番。観客席は少々固く、緊張の中、場内暗転。雷鳴が響き渡り、下手奥から、下駄の音とともに美津江が飛び込んでくる。家に上がり込んだ途端、再び大雷鳴! 美津江の「おとつた〜ん、こわ〜い!」という悲鳴。上手奥から「こっちじゃ、こっち」と現れたのは亡くなったはずの父竹造。「おとつたん?!」とストンキョウな美津江の声……快調なすべり出しだ。

観客はじっくり静かに観入っている。父が娘の“恋の応援団長”として現れたというあたりから漸く観客の心も解れ、ひょうひょうとした須永の演技に客席からクスクスと笑いが起こる。松澤の素直でストレートな演技が観客の心を打ち、客席の涙を誘う。

終盤、娘が「ありがとありがとうございました」と父に深く礼を告げると、遠くからオート三輪の音。その音に気づいた娘の顔から明るい笑みが溢れ、恋人を迎えに行く。梅雨空が晴れていくような音楽とともに、優しい暗転が舞台を包む。……無事終わった。と、場内からは熱く深い拍手が沸き起こった。成功だ!!

22日19:30、2回目はほぼ満杯の客席。

リラックスした雰囲気が始まった。前列中央にはなんと父親に連れられた小学生二名が座っている。



前半から観客の反応は良く、舞台上の二人の掛け合いも弾む。小学生も笑っている。後半、二人の熱演に客席からすすり

泣く声が聞こえてきた。あの小学生たちも鼻をすすり上げている。やはり親子の愛情は万国共通で、だれもが共有できるのだ。大きな拍手とともに会場は深い感動に包まれた。公演は大成功!!

終演後、恥ずかしそうにサインが欲しいと楽屋にやって来たのはあの小学生二人。照れながら握手を交わし、サインを受け取った彼らは、得意げに父親とともに帰って行った。



楽屋でのサイン

新聞社のインタビューの後、全員で歓迎宴に出席。中国の方々による行き届いた歓迎宴はいつもあたたかい。道化座一同、上海のスタッフと一緒に大きなテーブルいっぱいには並べられたご馳走に舌鼓、頬を赤く染め、美酒に酔いしれた。異国の地でこんなにも心を許し合えるのは、お芝居のお蔭である。心から嬉しく思う。お芝居の神様に大感謝!!



翌23日14:00、生憎の雨で観客の出足は鈍ったが、最終回も熱い拍手の内に幕を閉じ、上海での3公演を無事終えた。

今回の<上海国際当代戯劇季>はイギリスとの演劇交流も兼ね、エジンバラフリンジ演劇祭優秀4作品も参加、10月26日~12月7日の長期に渡り13演目が上演される。3作品しか観劇できなかったが、糸を紡ぐ蝶の姿を借りて女性の喜びや悲しみを体当たりで演じたイスラエル舞踊劇場による『蝴蝶』が心に残った。質にこだわった作品が集められているようだが、中国のオリジナル作品に出会えなかったのが残念だった。

これだけの規模で演劇祭を開催運営するのは真に困難、その苦労は推して知るべし。もちろん楊紹林総経理、呂涼芸術監督はじめセンター全体の後押しがあつてのこととは思いますが、劇作だけでなく制作にも脂ののりきった三十代の喻榮軍氏、語学も堪能な二十代の張女史を中心に、若いスタッフたちが真摯に演劇祭に取り組んでいる。その姿は心強く頼もしい。彼らの成長がこの演劇祭を力強く支え、ますます発展することを願いつつ、道化座一同帰路に着いた。

上海の観客の皆さまはもちろん、惜しみないご協力、ご支援を下さった上海話劇芸術センターの皆さま、翻訳に協力して下さった黄棟氏に厚く御礼申し上げます。

最後になりましたが、今回上海での『父と暮せば』上演をご快諾下さった井上ひさし先生に心より感謝申し上げます。

舞台写真：島田明子
文責：馬場晶子

